



Title	問題に即した語り口で：硬い言葉をマッサージ / 新しい波「わかる」哲学
Author(s)	朝日新聞
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 13-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81732
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

問題に即した語り口で ——硬い言葉をマッサージ／新しい波「わかる」哲学

新しい哲学が登場している。専門用語にとらわれず、生活人として実際の現場で、わかりやすい日常の言葉を使い、考える過程を大切にしようという。まだ一部の研究者の動きだが、哲学は難解と敬遠してきた人たちにも共感を呼んでいる。

「臨床哲学研究会」——こんな聞き慣れない名前の哲学を看板に掲げた研究会が生まれたのは二年前だった。アカデミズムの内部に閉じこもるのではなく、「問題が起きる現場に即した哲学の語り口を探そう」という狙いで、大阪大学の倫理学研究室が中心になって呼び掛けた。

現場の悩みを一緒に考える 「現場」とは例えば、病院や学校だ。忙しさのなかで自分なりの看護の理念を求める看護婦さんや、不登校や進路に悩む生徒らの相談にのっている高校の先生たちが参加してくれた。みんなそれぞれの現場で自分なりの言葉を探している人たち。体験談や悩みを聞きながら、研究者たちも一緒に考えてきた。

十一月下旬に開かれた研究会では、音楽療法士から音楽療法がまだ認知されていない現状や知的障害者やお年寄りを抱える現場とのコミュニケーションがうまくとれない悩みが報告された。

そこで、倫理学の研究者が「療法という言葉が問題だ。原因を取り除けば結果がよくなるはずだ」という科学主義的な発想にとらわれているのではないか」という意見を出した。そして、音楽による癒し（いやし）は、科学主義的な一対一対応では論じられないという『科学主義への疑い』が浮かびあがった。具体的な言葉で表現することで、ぼんやりとした悩みの一因をはっきり示し、解消への道を探る手掛かりとなったという。

子どもの疑問そのまま表現 「働く現場からは『自分なりの重みを載せることのできる言葉』がほしいという要望が強い。すぐれた人ほど、経験からくる“気づき”が蓄積されているが、伝達できる形になっていない」と世話人の中岡成文・大阪大教授。「哲学・倫理学の専門家が伝統的な用語をヒントとして出し、自分の日常を言葉へと結晶させてもらえれば」と話す。

今、会員は約四十人。それぞれが研究会で考えた成果をまとめた『臨床哲学ニューズレター』創刊号も最近、刊行された。

日常使う言葉で書かれた哲学は、一般読者の共感をも呼んでいる。

永井均・信州大教授が書いた『子どものための哲学対話』は、二万部が出版された。「ぼく」と猫の「ペネトレ」との対話形式になっている。

たとえば「元気が出ないとき、どうしたらいいのか」との問いには「その理由や原因を徹底的に考えたのち、ほかのことに没頭し、時がたつのを待つ」という知恵が示される。だが絶対的な方法とは言わず、読者に考えを促す。哲学的用語も極力避けている。

読者カードには「哲学に興味がわいた」「私の欠損していた部分にあてはまった」など、九歳から七十歳代までの幅広い年齢層から感想が寄せられている。

永井さんは「子どものころ感じた問題を、哲学をやっている人間としてどう答えるかを書いた」という。これまでの哲学書と違うのは、外国の学者の教えを学ぶ姿勢ではなく、学ぶ以前に子どものころに疑問に思ったことをそのまま書いたという点だ。「その方が正統なのではないかと僕は勝手に考えたんです」。

大学の研究室でも新しい試みが始まっている。

東大教養学部総合文化研究科の大学院で、助教授の野矢茂樹さんは「地に足のついていない学生の言葉を着地させる」ゼミを開いている。学生たちの硬くなりがちな言葉を平たくし、専門の垣根も取り払って問題そのものをみんなで考えようとしている。

考える過程をゼミでも重視 先日でのこと。ある学生が外国人研究者の論文を読み上げた。「論理法則は、そもそも我々が何かを思考するということが成功するための必要条件を表現している」

「わかんないな」と野矢さんが遮った。「生き延びたいなら論理的に考えなさい、生き残りやすい考え方こそが論理的なんだと言っているわけでしょう」。硬い言葉をほぐしていく。

しかし、単に難しい言葉の言い換えを狙っているのではない。問題は身近なところにある。だからこそ、自分の言葉で考える過程を大切にしようというのだ。

野矢さんは、一般教養の授業ではなただけ専門用語を使わないようにしている。そんな姿勢が人気となり「科学哲学」の授業はいつも立ち見が出るほど。「考えるプロセスを楽しむ学生が集まって、実に生き生きと聞いてくれる。文通めいたやりとりが始まったこともあった」という。

日常の言葉で考える過程を大切にする哲学が生まれた背景には、西洋生まれの“大きな思想”が、今の日本人にすっかりこなくなっていることもあるようだ。永井さんは「自分の問題を自分の言葉で考えることができ、それはつまらないことでもない」という時代の気分が出てきたという。

野矢さんは、現代には先を急ごうとする気分から、立ち止まってみる気分への変化」があると見る。

「哲学とは立ち止まる技術で、見過ごしがちだったものに気付かせる役割がある。立ち止まったところに思わぬ景色が見えてくる。それが哲学なんです」

（『朝日新聞』東京版 1997年12月4日 馬場秀司記者）